

## 埼玉掃除に学ぶ会・埼玉便教会主催 第4回「被災地に学ぶ会」のご報告

日時 平成 24 年 3 月 25 日(日) 午前 0 時 10 分八潮高校発～午後 11 時 40 分八潮高校着  
活動場所 石巻市給分浜  
参加者 48 名 (男性 21 名・女性 27 名、教員 14 名・学生等 22 名・一般 12 名)

「3.11」から 1 年。報道特番も多かったためか、今回はボランティアへの関心・意欲がいつも以上に高く、申込みが殺到しました。初めて被災地入りする方も多く、「躊躇していましたが、チャンスをいただいて、やっと来ることができました」という期待感がバス内に溢れていました。また、中学 2 年の 7 名をはじめ、中高生が 18 名を占め、若い世代の「熱く純粋な思い」に、一同奮い立ちました。

日帰りの埼玉便は、午後には石巻を出発する必要があるため、今回は 7 時 30 分には牡鹿 VC に到着し、昼食も車内でとるようにして、なるべく長く活動時間を確保できるようにしました。



0:10	八潮高校発	13:40	現場発・昼食(車内)
7:30	牡鹿 VC 着	15:30	石巻・大川小にて追悼
9:20	現場着・作業開始	15:50	同校発
13:00	作業終了	23:40	八潮高校着・解散

### 【牡鹿半島へ】

「春日部観光」の大型バスで、八潮高校を 0 時 20 分に出発。石巻港 IC—門脇小学校—「木の屋鯨缶」を経て、7 時 30 分に牡鹿災害 VC に到着しました。DVD で見る「あの日」に VC 周辺を襲った大津波の様態には、一同唖然としていました。今回も埼玉チームでは参加費を徴収し、VC 活動用の義捐金として手渡させていただきました。これも「日本を美しくする会」より多大なる援助をいただいているお陰です。

### 【現場の給分浜にて】

浜から 200m ほど離れた「かつて居住地であった」と思われる給分浜の現場一帯は、大型瓦礫はすべて撤去されており、瓦片や木片、ガラス片、石など比較的小さな瓦礫が無数に散在していました。他団体の到着待ちのため現場入りが遅れましたが、オリエンテーションを経て 9 時 30 分過ぎに作業が始まりました。各自一枚ずつ土嚢袋を手に、思い思いに散らばって瓦礫を集めます。表面上、目立った瓦礫は撤去されてきましたが、地面の少し下には想像を絶する量の瓦礫が埋まっていた。

1 時間後の休憩に際して、リーダーミーティングを開き、作業効率や作業範囲、安全面などについて協議しました。そこでチームを①大型瓦礫担当 ②小型瓦礫担当 ③斜面担当に分け、各チームにリーダーを配置して作業を進めることにしました。また、チーム内では、効率性や安全性についてのコミュニケーションを随時とってもらいました。そしてこのタイミングで「大阪便教会チーム」が合流して下さることになり、約 100 名に増えたメンバーで現場は活気付き、一層効率よく作業が進んでいきました。



驚かされるのは中高生の活躍ぶりです。男女の別なく 10 代は正に「バリバリ」と働き、そのひたむきな姿に接したわれわれ大人たちは、大きな力をいただくことができ、自らを鼓舞することができるのです。

1 時間ほどして再度休憩となりました。その際のリーダーミーティングで出た「斜面付近の土中に無数の生活用品等が埋まっているので、増員すべき」という意見と「活動エリアを集中させるべき」という意見が次の作業時間から反映されるようになりました。この斜面付近では、掘れば掘るだけ夥しい大型瓦礫や生活用品等が姿を現すので、作業は延々と続きます。しかしながら、残念なことに撤収時刻である 13 時となったため、作業は終了となりました。

### 【昼食 そして大川小へ】

昼食は時間節約のためバス内でとります。今回は仮設商店街である「おじかのれん街」にある「みさき屋」さんで 500 円のお弁当を、牡鹿の社会福祉団体「くじらのしっぽ」さんで 135 円の手作りパンを用意していただきました。作業後であったこともあり、一同そのおいしさと地域の温かさに感激していました。

作業を無事終えた上、美味しい昼食をいただいたことで半ば充足感に包まれていた車内の雰囲気も、大川小学校付近に至ると一変します。何人も言葉を発することを認めないような寂しく厳しい灰色の風景です。「私どものような他所者が堂々と大型バスで乗り込んでいいものか。未だ行方不明の我が子を探し続ける親御さんや遺族の方々には気分を害するだろうな」と躊躇するところもあります。ましてやこの日はわれわれ以外にも、多くの車が同小を訪れており、観光スポットのような様子には違和感を覚えました。それでも「被災地に学ぶ会」として、このプログラムは外すべきでないと判断します。1 人一本ずつお線香を手にして、丁寧に追悼させていただきました。

### 【「一歩目」を支える】

「あの日」以来 1 年間、多くの人が「被災地に行ってみたくて、どうしたらいいのかわからない。自分に何ができるのか」と自問自答し続けてきたことでしょう。そんな中、被災地で「初めての一歩」を踏んだ参加者は、被災地からたくさんの大切な教えを受けたはず。そして次の一歩や「誰かの一歩」へと繋げてくれるに違いありません。「被災地に学ぶ会」の意義はそこにあるのだと思います。

貴重な学びの機会をありがとうございました。

